

## 『智恵子抄』考

— 詩「人生遠視」とその機能 —

### A Study of Chiekoshou

— Poetry *Jinseishi* and the function —

大島 龍彦

Tatsuhiko OSHIMA

#### 1 フロローグ

『智恵子抄』は構成上三つの世界から成り立っている。筆者は今、詩「人に」に始まる第一部を仮に「人恋譚」と称し、詩「樹下の二人」に始まる第二部を「同棲譚」とする。そして、本稿で取り上げる狂気に触れた第三部を「妻恋譚」と仮称し論を展開することにする。第三部をストレートに「狂気譚」と呼ぶには余りにも痛ましく、「妻恋譚」冒頭の詩「人生遠視」が、『智恵子抄』の中で智恵子を初めて「妻」と表現したことから、かく仮称することにした。

ところで、智恵子の精神障害の兆候が現れたのは、昭和六年の八月から九月、ちょうど光太郎が三陸取材の最中だった。それからおよそ四年間、詩「人生遠視」を書くまで、光太郎は智恵子をうたうことはなかった。

光太郎は詩集『智恵子抄その後』（昭和二十五年十一月龍星閣発行）の「あとがき」で、「『智恵子抄』は徹頭徹尾くしく悲しい詩集であつた」と回想。その特に「くるしく悲しい」智恵子の精神障害に触れた詩は、『智恵子抄』挿入詩二十九編中十編に及んでいる。

智恵子没後の昭和十五年、光太郎は『婦人公論』十二月号に散文「彼女の半生」(のち「智恵子の半生」と改題し、『智恵子抄』に挿入・以下本稿では「智恵子の半生」と記す)を書いた。その「智恵子の半生」の中で、光太郎は「昭和七年以来の彼女の経過追憶を細かに書くことはまだ私には痛々しすぎる」という。が、その後、光太郎は経過追憶を「細かに書くこと」はなかった。

そこで本稿では智恵子の逸脱していく常軌の姿を書簡等に求め、詩「人生遠視」の成立とその機能を中心に、精神障害をどのように詩に表現したのか把握してみたい。

なお、特に指定しない限り引用は『高村光太郎全集』(筑摩書房)に依った。

## 2 精神障害の原因に関する光太郎の見解

ところで、智恵子の精神障害の原因については、智恵子の父今朝吉が亡くなった大正七年以降、昭和四年に長沼家が破産し一家が離散したことや、その後、一時妹の嫁ぎ先(斎藤方・福島市)に身を寄せていた母の上京(昭和六年六月)を光太郎に秘密にしていた苦痛等とその原因を求めた伊藤信吉説<sup>注1</sup>、また、中原綾子との交情を示唆する湯原かの子説<sup>注2</sup>などがある。が、今、発病の真因の特定を本稿の目的とはしない。

しかし、後記のように光太郎の思考する精神障害の原因は少なからず詩に影響している。そこで発病の原因を光太郎がどのように考えていたか先ず把握しておきたい。

光太郎自身は「智恵子の半生」の中で精神障害に関する見解(智恵子没後二年後)を以下のように述べている。

当時、光太郎は智恵子の精神障害を精神病学者の一見解<sup>注3</sup>によったものか、「宿命的に持っていた精神上的素質」と捉え、結婚後は①芸術精進と家庭生活との板ばさみ、②肋膜炎を病んで以来の病臥、③父の他界と実家の破産など、「心痛苦慮は一通りでなかった」と結婚生活を振り返り、「更年期の心神変調が因となって精神異状の徴候があらわれ」と見ていた。

特に智恵子の精神破綻の原因は、①に関連したもので、「その猛烈な芸術精進と、私への純真な愛に基く日常生活の営みとの間に起る矛盾撞着の悩みであったであろう」という。

光太郎が見た智恵子の芸術精進は、

彼女は色彩について実に苦しみ悩んだ。そして中途半端の成功を望まなかったので自虐に等しいと思われるほど自分自身を責めさいなんだ。(中略) 彼女は最善をばかり目指していたので何時でも自己に不満足であり、いつでも作品は未完成に終わった。

と激しく厳しい。また、「思いつめれば他の一切を放棄して悔まず、所謂矢も楯もたまらぬ気性」で、「単純真摯な性格で、心に何か天上的なものをいつでも湛えて居」た智恵子の家庭生活は、「生来の勝気から自己の感情はかなり内に抑えていたようで、物腰はおだやかで軽佻な風は見られなかった」らしい。光太郎への智恵子の「愛と信頼の強さ深さは殆ど嬰兒のそのようであった」ようで、それはまた光太郎が作った「木彫小品を彼女は懐に入れて街を歩いてまで愛撫した」ことから窺える。

その芸術精進と家庭生活の板ばさみを光太郎は、「自己を乗り越えて進もうとする気力の強さ」に「随分無理な努力も人知れず重ねていた」と推察。「結局彼女の半生は精神病にまで到達するように進んでいたようである。私との此の生活では外に往く道はなかったように見える」と分析し、後に詩「ばけもの屋敷」(昭和十年九月二十四日作)で「主人は正直で可憐な妻を氣違いにした」と、うたった。

また、「どんな事でも自分一人の胸に収めて唯黙って進」む智恵子は、芸術だけでなく「精神上的の諸問題についても突きつめるだけつきつめて考えて、曖昧をゆるさず、妥協を卑しんだ」という。こうした性格からか、幻覚を見るようになった智恵子は、「寝台に臥しながら其を一々手帳に写生し」、「刻々に変化するのを時間を記入しながら次々と描いて」は光太郎に見せ、「形や色の無類の美しさを感じて語った」という。

異常ではあったが異状ではなかった智恵子の異状の一端<sup>注4</sup>と見る事ができるエピソードである。

### 3 常軌逸脱の諸相

その智恵子の異状を初めて光太郎が感じたのは、智恵子の「更年期が迫って来た頃のこと」だった。

以下、智恵子の精神障害に係わる叙述は、昭和六年から詩「人生遠視」が書かれた昭和十年頃の光太郎の書簡からピッ

クアップしたもので、引用は全て『高村光太郎全集』（筑摩書房）に依った。

昭和六年八月九日の夜から約一ヶ月ばかり、光太郎が時事新報社の仕事でアトリエを留守にしたときのことである。留守中訪ねてきた母や姪の話によると、智恵子は「余程孤独を感じていた様子で、母に、あたし死ぬわ、と言った事があるという」。智恵子四十六歳（数え年）のことである。

翌昭和七年七月十五日、その予告通り智恵子はアダリンによる自殺未遂を起こした。が、智恵子が書いた遺書の「その文章には少しも頭脳不調の痕跡は見られなかった」という。一ヶ月近くに及ぶ入院加療（八月九日退院<sup>注5</sup>）後、智恵子の体調は快復するものの、昭和八年五月十一日付長沼せん宛光太郎のはがきには、「まだ頭が疲れてゐる様子で外出が出来ません」とある。その後、光太郎の依頼で母せんがアトリエを訪問した後、智恵子は元気を取り戻したようである。光太郎と智恵子は草津温泉に出掛けている<sup>注6</sup>。

ところが、元気になったのは束の間で、七月五日付水野葉舟宛光太郎のはがきには、「ちゑ子はどうも頭が悪くて一寸心配です。神経を痛めてゐるのでまづ気ながに療養する外ありません。年齢から来る症状かとも思ひます」とある。

その後、智恵子の「種々な脳の故障が起るのに気づ」いた光太郎は、昭和八年八月二十三日、智恵子を入籍し、翌日から東北地方の温泉まわりをした。猪苗代湖に近い裏磐梯川上温泉をかわきりに、いずれも婦人病や脳神経に効くといふ青根温泉、不動湯温泉、塩原温泉の順に、約三週間の旅だった<sup>注7</sup>。

不動湯温泉に現存する宿帳には光太郎の筆跡で「智恵 妻 四二」とある。智恵子の実年齢はこの時四十八歳（数え年）である。旅立つ前日に入籍させた光太郎に智恵子の年齢が分からないはずはない。智恵子の脳障害の進展状況をはかるために宿帳記載時に智恵子に問うた、その答えが四十二歳だったか。湯治の旅を切り上げ上野駅に帰着した時、智恵子の症状は「出発した時よりも悪化してゐた」（智恵子の半生）。

その後、症状は一進一退だったようで、既記のように最初智恵子は幻覚を多く見、或る期間を経て、全体に意識がひどくぼんやりするようになったという。

昭和八年十一月六日付水野葉舟宛光太郎の封書には、

今ちゑ子は殆ど痴呆状態をつづけてゐます。此は体質に潜んでゐた精神病の素質が出て来たのではないかと心配し

てゐます 遺伝梅毒の懸念を持つて血液検査をしてもらひましたところ此方は痕跡無しといふ事です 年齢上の更  
年期に来る強い神経衰弱かと思ひますがそれにしても少し度が強過ぎます

とある。一ヶ月後の十二月四日付更科源蔵宛光太郎のはがきに、「去年の夏以来ちゑ子の病気がわるくて此頃では小生  
一日も外出する事不可能になりました」とあるように病は進行し、その状態は年を越しても続いた<sup>注9</sup>。昭和九年三月  
の中旬頃から四月二十五日頃、智恵子は意識と知能の全部を取り戻すところまでは快復していなかつたが幾分快方に向  
かい、以前おこなつていた機織りを再び始め、しきりにしていたといふ<sup>注9</sup>。また、この頃、訪問者があると病気のた  
めにはよかつたようである<sup>注10</sup>。

ところが、五月に入ると症状が悪化したようで、光太郎は親友水野葉舟に宛て、次のようなハガキを送っている。

ちゑ子は一時かなりよくなりかけたのに最近の陽気のせるか又々逆戻りして、いろいろ手を尽したが医者と相談の  
上やむを得ず片貝の片田舎にゐる妹の家の母親にあづける事になり、一昨日送つて来ました。小生の三年間に互る  
看護も力無いものでした。鳥の啼くまねや唄をうたふまねしてゐるちゑ子を後に残して帰つて来る時は流石の小生  
も涙を流した。(五月九日付ハガキ)

この時、既に智恵子が「鳥の啼くまねや唄をうたふまねしてゐる」のは注意される。母や妹の居る九十九里浜の家に  
智恵子を転地させたのは、昭和九年五月七日のことである。後年この転地療養を振り返り、一週一度汽車で訪ねた光太  
郎が見た智恵子は、「海岸で身体は丈夫になり臙腫<sup>ようしゅ</sup>状態は脱したが、脳の変調はむしろ進んだ。鳥と遊んだり、自身が  
鳥になつたり、松林の一角に立つて、光太郎智恵子光太郎智恵子と一時間も連呼したりする」姿だった(智恵子の半生)。  
転地療養も半年を過ぎた頃、更に病状が悪化したため、光太郎は十二月二十日、智恵子をアトリエに連れ戻している。  
アトリエに連れ戻した智恵子の病状は、機関車のように驀進し、自宅療養が危険なほど狂暴な行為を始めるようになつ  
たという(智恵子の半生)。

その狂暴状態の具体は中原綾子<sup>注11</sup> 宛光太郎の封書に詳しい。一部引用する。

昭和九年十二月二十八日

ちゑ子の狂気は日増しにわるく、最近は転地先にも居られず、再び自宅に引きとりて看病と治療とに尽してゐますが連日連夜の狂暴状態に徹夜つづき、さすがの小生もいささか困却いたして居ります（中略）此を書いてゐるうちにもちゑ子は治療の床の中で出たための囁語を絶叫してゐる始末でございます、看護婦を一切寄せつけられぬ事とて一切小生が手当いたし居り殆ど寸暇もなき有様です。

昭和十年一月八日

一日に小生二三時間の睡眠でもう二週間ばかりやつてゐます、病人の狂躁状態は六七時間立てつづけに独語や放吟をやり声かれ息つまる程度にまで及びます、拙宅のドアは皆釘づけにしました、往来へ飛び出して近隣に迷惑をかける事二度、器物の破壊、食事の拒絶、小生や医師への罵詈、薬は皆毒薬なりとてうけつけません、（中略）女性の訪問は病人の神経に極めて悪いやうなのであなたのお話をきく事が出来ません、（中略）（病人は発作が起るとまるで憑きものがしたやうな、又神がかり状態のやうになつて、病人自身でも自由にならない動作がはじまります、手が動く首がうごくといったやうな。）（病人の独語又は幻覚物との対話は大抵男性の言葉つきとなります、或時は田舎の人の言葉、或時は候文の口調、或時は英語、或時はメチャクチャ語、かかる時は小生を見て仇敵の如きふるまひをします）

昭和十年一月十一日（薬液筋肉注射の治療の結果）

ちゑ子も此の二三日は以前ほどの狂態をせぬやうになり、出たための独語や放吟はやりませんがあまり高声ではなくなりました。薬は一切のみませんが、食事も少々つつするやうになり、又時々分別を見せる兆候が見えます。小生も一縷の望みを其れにかけてゐます。（中略）病勢の一進一退ははありましたが其はまるで潮流のやうに結局押し流れるまでは押し流す力でありました。医者は此の狂躁状態は多分恢復する前の兆候だらうと此頃言ひます。其の真ならん事を神かけて祈つてゐます。

昭和十年一月二十二日（詩稿「人生遠視」同封）

チエ子は今日は又荒れてゐます、アトリエのまん中に屹立（ママ）して独語と放吟の法悦状態に没入してゐます、

さういふ時は食物も何もまつたくうけつけません、私ただ静かに同席して書物などよんでゐます、仕事はまつたくできません、

昭和十年二月八日

此頃はち多子は興奮状態の日と沈静状態の日とが交互に来てゐます、ひどく興奮して叫んだり怒つたりした日のあと急に又静かになり、大きに安心してゐると又急に荒れ始めるといふ状態です、よく観察してゐますと智恵子の勝気の性情がよほどわざわざわひしてゐるやうに思ひます、自己の勝気と能力との不均衡といふ事はよほど人を苦しめるものと思はれます、

次第にエスカレートしていく狂暴状態により、自宅療養が危険と判断した光太郎は、昭和十年二月下旬、智恵子を南品川のゼームス坂病院に入院させ、一切を院長齋藤玉男博士に委ねた。

入院後の智恵子は「精神病者らしい風姿を備へて来た」といふ事注12。また、三月二十九日付長沼せん子宛光太郎のはがきに、「此頃は大層おとなしくしてゐるといふ事でした、まだわけの分からぬ事を話しますが、割におだやかにになりました、健康はいい様で肥つてゐました」とある。五月、六月と比較的穏やかな日々を過ごしたようであるが、八月には再び「千葉の海岸でおぼえた漁夫の荒い言葉でさまざまな独語注13」をするなど興奮状態が続いた。この頃、光太郎は「二十年前の夏の上高地でのたのしかつた二人の生活をこまこまと時々身にしみて思ひ出します注13」という（参考詩「或る日の記」）。

十月二十日付中原綾子宛光太郎の封書には、「此間医者に散歩を許されましたが門から外へは一歩も出たがらなかつたさうです」とあるから、やや穏やかさを取り戻したようである。しかし、春に肥つていた智恵子は秋から翌昭和十一年一月に掛けて「大層やつれ」、「おとなしく臥注14」ている。「其後少しづつ食べる様」になつたものの、精神の状態は悪くも良くもならない病状は安定注15。その後、一進一退の状態が続くものの退院するまでの恢復は見られず注16、昭和十二年の五月を迎え、光太郎が九十九里にいた智恵子を思い出していた頃、智恵子は「すつかり以前の狂暴状態」になつてしまつた注17。陽気のせいか智恵子の容態がすつかり逆戻りすると、光太郎は再び「幸福だつた智恵子との二



人の生活の過ぎし日を思ひ出します」<sup>注8</sup> という（参考詩「亡き人に」）。

六月十七日もまだ「時候のため興奮状態の様子」<sup>注9</sup> だったのが、七月十五日頃になって「幾分落ちつい」<sup>注10</sup> たようであるが、八月七日「さつぱり良くはなりません」<sup>注10</sup> と更光源蔵宛封書の中で嘆いている。この頃（九月七日）光太郎は更光源蔵に「今はすべてを覚悟してゐます」<sup>注11</sup> と書き、十一月二十六日付長沼せん子宛光太郎の書留封書にも、「智恵さんも静かにしてゐるやうですがいつになつたら快復する事か考へると心細いと思ひます」と、快復の望みに一抹の不安を抱いている。

翌昭和十三年三月二十四日付長沼せん子宛光太郎の書留封書に、「先日病院へまゐりましたが今月も智恵子に会はずにかへりました。興奮するといけないと思つて案じられます、春先になるといつも悪くなるやうに思ひます」とある。一切を院長斎藤玉男博士に委ねた光太郎が十月五日、五ヶ月ぶりに会つた智恵子は、「容態あまり良からず、衰弱がひどい」<sup>注12</sup> ものだった。

その衰弱は素人目にも危険な状態に映つたに違いない。その日の夕方、光太郎は智恵子の母せんに上京を促すはがきを書いた<sup>注12</sup>。そして、はがきを投函後に、気になつた光太郎は再び智恵子を見舞つた（光太郎の弟豊周の『光太郎回想』に依れば午後七時頃だったという）。智恵子はその甲斐もなく数時間後鬼籍に名を連ねることとなつた。光太郎は当時を次のように回想する。

最後の日其（智恵子制作の紙絵）を一まとめに自分で整理して置いたものを私に渡して、荒い呼吸の中でかすかに笑う表情をした。すっかり安心した顔であつた。私の持参したレモンの香りで洗われた彼女はそれから数時間のうちに極めて静かに此の世を去つた。昭和十三年十月五日の夜であつた（智恵子の半生）。（参考詩「レモン哀歌」）。

また、智恵子の姪で付き添い看護をしていた宮崎春子は、十月五日夜かけつけた伯父さまの持参されたレモンをがりがりとかまれて、「智恵さん。」と呼ばれる伯父さまにしつかと手をたくされ、みかわされた伯母の瞳はこの時正気にかえつていた。

と述懐している<sup>注13</sup>。また、臨終に立ち会つた斎藤徳治郎医師は、智恵子の臨終と同時に、黒の和服に袴姿の光太郎の巨大な身体が大きくゆれだしたという<sup>注14</sup>。午後九時二十分だった。



弟の豊周に「智恵子が死んだんであと始末をしたいから一寸来てくれ」と電話があつたのは十一時過ぎだった。豊周が病室に入ったとき、光太郎は「枕元に坐ったまま、ただじっとしているだけだった」（『光太郎回想』）。一時間四十分以上一人静かに智恵子の傍らに寄り添っていた光太郎の心中はいかばかりだったか。が、その後「智恵子を抱いて、そつとアトリエまで連れ帰った」光太郎の「外見はむしろ冷静で、取り乱したところはまったくなかった」（『光太郎回想』）という。アトリエの長いすに智恵子を寝かせた光太郎は、「あれだけ帰りがついていた家に、いよいよ帰ってきたけれど、死んじゃって」（『光太郎回想』）と、ポツンと言ったという。（参考詩「荒涼たる帰宅」）

#### 4 詩「人生遠視」とその成立

さて、昭和六年以降途絶えていた智恵子をうたった詩は、およそ四年間の空白の後、再開された。昭和十年一月二十一日作と言われている詩「人生遠視」である。以下、論の展開上、A・\*A・\*\*Aという符号を私的に施した。

\*\*A 人生遠視

足もとから鳥がたつ

自分の妻が狂気する

自分の着物がぼろになる

照尺距離三千メートル

ああ此の鉄砲は長すぎる

既記のとおり智恵子を「妻」と表現した初めての詩であり、先ず不意打ちをくらった驚愕を「足もとから鳥がたつ」と、冒頭の一行で表現し、次にその飛び立つ立ち去り方が「狂気」だとストレートに表す。続いて日常の破綻、生活の全てが崩壊することを、「自分の着物がぼろになる」と比喩し、更に、将来の展望は銃の照準具を持ってしても定めがたい

と結ぶ。

伊藤信吉は『鑑賞智恵子抄』<sup>註</sup>の中で、「『自分の妻が狂気する』と言うことによつて、最悪の事態、究極の事態を、読む人の胸に刃物のように突きつける」「この最初の二行に、装飾的な言葉は一片ひよかけもない。いきなり絶対的なところへ読者を追い込む」と分析しながら、更に最悪の事態、絶対の場に追い込まれたのは読者ではなく、実は光太郎その人だったと指摘する。

既記のとおり、転地先からアトリエに連れ戻した智恵子は、出たための嘖語を絶叫したり、六、七時間立てつづけに独語や放吟をする等、連日連夜の狂暴状態であった。

この連日連夜の狂暴状態の中、狂気する智恵子の傍らにいて書いたのが詩「人生遠視」である。

ところで、昭和十六年八月に龍星閣から出版した『智恵子抄』は、詩「人生遠視」の制作年月日を「昭和十年一月二十二日作」と記している。が、昭和十年一月二十二日付中原綾子宛光太郎の封書（詩稿「人生遠視」同封）には、

昨夜ふと一聯の詩を書きました。あなたの詩集にいつ序が書けるかわかりませんので、ともかく此の短詩もお送りして置きます、序が間にあへばよし、間にはなかつた時は此をおつかひ下さつても差支さしつかいませぬ

とあり、二玄社刊行の『高村光太郎全詩稿』に転写されている原稿用紙から推測すると、「昨夜ふと一聯の詩を書きました」という連日連夜の狂暴状態の中、一月二十一日に作り、翌二十二日に中原綾子に送った詩「人生遠視」は、次のようなものであったようである（旧漢字は新漢字に改めた）。

A 人生遠視（序にかへて）

高村光太郎

足もとから鳥がたつ

自分の妻が毒をのむ

自分の妻の気がくるふ

照尺距離三〇〇〇米

ああ此の鉄砲は長すぎる

封書記載記事のように、初め中原綾子の詩集（『悪魔の貞操』）の序の代わりとして書かれるが、智恵子全快の後を憂慮した中原綾子の指摘に、光太郎は「智恵子が全快でもしたあとでそれを見たら変なものだらうとも考へました」<sup>注26</sup>と、序の代わりとすることを撤回。そしてこの詩はおよそ半年後、中原綾子が主宰する歌誌『いづかし』に発表（\*A）する際、（序にかへて）を省き、「気がくるふ」を「狂気する」に、「三〇〇米」を「三千メートル」に一部分が改められた<sup>注27</sup>。

更に河出書房刊『現代詩集』（昭和十四年）掲載時に（\*A）「自分の着物がぼろになる」を加え、「メートル」を「メートル」に改めている。

こうして光太郎は、「妻が毒をのむ」「妻の気がくるふ」という詩になりにくい生なまの情緒に手を加え、不足を補いながら次第に改訂し、昭和十六年八月、『智恵子抄』成立時に、自筆原稿を澤田伊四郎に渡し採録を希望したという<sup>注28</sup>。

## 5 詩「人生遠視」の機能

それでは何故、光太郎は詩「人生遠視」を第三部「妻恋譚」冒頭詩として希望したのか。また、挿入することで「妻恋譚」はどうなるのか。そこで、次に詩集『智恵子抄』における詩「人生遠視」の機能について、詩「風にのる智恵子」との比較を通して考えてみたい。

連日連夜の狂暴状態の中、狂気の真つ直中で書かれた詩「人生遠視」からおおよそ一週間後、智恵子は南ゼームス坂病院に入院。智恵子の入院により日常的狂気から物理的距離を置いた光太郎は、昭和十年四月二十五日、詩「風にのる智恵子」（五月十日発行『書窓』）に発表した。

風にのる智恵子

狂った智恵子は口をきかない

ただ尾長や千鳥と相図する

防風林の丘つづき

いちめんの松の花粉は黄いろく流れ

五月晴の風に九十九里の浜はけむる

智恵子の浴衣が松にかくれ又あらはれ

白い砂には松露がある

わたしは松露をひろひながら

ゆつくり智恵子のあとをおふ

尾長や千鳥が智恵子の友だち

もう人間であることをやめた智恵子に

恐ろしくきれいな朝の天空は絶好の遊歩場

智恵子飛ぶ

母や妹の居る九十九里浜に智恵子を転地療養させたのは、詩「風にのる智恵子」を書いた一年前の昭和九年五月七日のことである。

「智恵子の半生」には、その療養生活を振り返って、「海岸で身体は丈夫になり朦朧状態は脱したが、脳の変調はむしろ進んだ。鳥と遊んだり、自身が鳥になったり、松林の一角に立つて、光太郎智恵子光太郎智恵子と一時間も連呼したりするようになった」とあった。

また、友人水野葉舟へのハガキに「一昨日送つて来ました。小生の三年間に互る看護も力無いものでした。鳥の啼く

まねや唄をうたふまねしてゐるちゑ子を後に残して帰つて来る時は流石の小生も涙を流した」（五月九日付はがき）とあった。丁度一年前の五月に預けたばかりの智恵子を想起して詩「風にのる智恵子」を書いたものと考えられる。

詩「風にのる智恵子」が公表された昭和十年五月、光太郎は「新茶の幻想」というエッセーを書いている。大正十五年六月号の『とねりこ』に発表した詩「新茶」を間に挟んで、五月と新茶にまつわるエピソードを記したもので、引用詩に連続して、

のどやかなのか、追ひかけられてゐるのか、私の頭は混乱する。五月、五月、五月は私から妻を奪った。去年の五月、私の妻は狂人となつた。

と述懐している。

とまれ、冒頭の「狂つた智恵子」という語り出しは余りにも唐突である。詩中の「もう人間であることをやめた智恵子」は、光太郎とも口を聞くことなく、ただ、友だちになつた尾長や千鳥と相図するばかりである。

「鳥の啼くまねや唄をうたふまねしてゐるちゑ子を後に残して帰つて来る時」に流した光太郎の涙は、静かさの中にも愛するものを奪われた激しい悲しみや憤りを象徴している。

『智恵子抄』を刊行した出版社の主澤田伊四郎は、詩「風にのる智恵子」を一読して心打たれたという。そしてその感想を次のように語っている<sup>注29</sup>。

大自然の大きさと、人間の小ささ、九十九里浜の茫々たる海岸を、気の狂つた妻のあとをたどる光太郎。絶望的な哀しみが、九十九里浜の自然と一体化しておりながら、なお、その哀しみを突き放して、わかりやすい言葉で客観的に書いている。

なお、詩「風にのる智恵子」を五月十日発行の『書窓』に発表したとき、最終行「智恵子飛ぶ」はなく、『智恵子抄』成立の時に書き加えられた。北川太一はこの新たに加えられた一行に、「この晴れた大空を遊び場として」「千鳥や尾長のような自然のかのありのままの存在」となった智恵子は、「それらの仲間と思ひのまま飛び遊ぶようだ」<sup>注30</sup> という。

詩「風にのる智恵子」は既記の通り、智恵子の入院によって物理的狂躁から解放された幾分一息つけた状況下で、一年前を回想して作られたものである。表現される前に情緒そのものに十分な推敲がなされたためであろう、現形成立時

点で既に光太郎納得の詩であった。『智恵子抄』成立時に僅かに加わったのは一行。ただ、この一行が更に詩に広がりを与えているのは注意される。

北川太一は光太郎が「かなしい狂気の現実さえ凄絶な美意識によって昇華」した（『智恵子相聞』蒼史社）という。が、その凄絶な美意識による詩の昇華には、いずれも環境と時間が必要であった。

詩「風にのる智恵子」に連続する詩「千鳥と遊ぶ智恵子」は、二年数ヶ月後の昭和十二年七月一日に作られた。「千鳥と遊ぶ」「風にのる」という違いはあるが、舞台も同じ九十九里、「もう人間であることをやめた智恵子」「人間商売さらりとやめて、/もう天然の向うへ行つてしまつた智恵子」という主題も同じ。ただ、そんな智恵子の姿を「二丁も離れた防風林の夕日の中で/松の花粉をあびながら私はいつまでも立ち尽す。」と、呆然とする作者自らを登場させているのは注意されるが、以後、妻恋譚を構成する智恵子の精神障害に触れた詩は、いずれも「五月になつて松の花の咲く頃と思ひます、先年ちゑ子が真亀に居た頃を思ひ出します」<sup>注31</sup>、「二十年前の夏の上高地でのたのしかつた二人の生活をこまこまと時々身にしみて思ひ出します」<sup>注32</sup>、あるいは、「幸福だつた智恵子との二人の生活の過ぎし日を思ひ出します」<sup>注33</sup> という回想の中で成立している。

ところが、詩「人生遠視」は智恵子を「妻」と表現した初めての詩であり、連日連夜の狂暴状態（囁語を絶叫し、六七時間立てつづけにする独語や放吟、更に光太郎を仇敵にする等）の智恵子の傍らにいて書いたものである。そして、「妻が毒をのむ」「妻の気がくるふ」という生なまの情緒に手を加え、舌頭千転の結果、妻恋譚の入り口にふさわしい詩へと昇華していった。

いくら詩とはいえ、妻恋譚の冒頭が、いきなり「狂つた智恵子は口をきかない」では余りにも唐突すぎる。詩「風にのる智恵子」の冒頭の「狂つた智恵子」あるいは詩中の「もう人間であることをやめた智恵子」は、「狂気」した結果であり、光太郎は智恵子の最悪の事態である精神障害を公にする言わば妻恋譚の玄関、入り口にふさわしい詩として「人生遠視」を位置づけ機能させたと言えるのではないだろうか。

なお、詩「山麓の二人」や「梅酒」など文献に見ることのない智恵子の姿を伝えて興味深い別稿に譲る。

注

注1

伊藤信吉『鑑賞智恵子抄』昭和四十三年十二月三十日・角川書店刊による。

注2

湯原かの子『高村光太郎——智恵子と遊ぶ夢幻の生——』二〇〇三・ミネルヴァ書房による。

注3

光太郎の知る当時の精神病学者の一見解。

注4

精神病学者の意見では、普通の健康人の脳は随分ひどい苦悩にも堪えられるものであり、精神病に陥る者は、大部分何等かの意味でその素質を先天的に持っているか、又は怪我とか悪疾とかによって後天的に持たせられた者であるという事である。「智恵子の半生」による。

注5

かつて津田青楓が「高い塗下駄をはいて着物の裾を長く引きずるようにして歩いていたのをよく見かけた」という智恵子の姿は異状ではなく異常ということか？

注6

昭和七年八月八日付長沼せん子（世田谷区太子堂）宛光太郎のはがき。

注7

ちゑ子の容態追々よろしく、多分明日午後には退院の運びとなりませう

注8

五月十八日付母長沼せん宛連名のはがき。

注9

先日はおいで下されおかげさまで元気になりました あれからすぐ仕事を一つ終つたので早速出かけました 草津へ来ましたがちゑ子は始めてですお湯がよいのでからだにきき相に思ひます 二三日で又帰ります

注10

大島裕子『智恵子抄を歩く』新典社刊による。

注11

昭和九年三月一日付秋廣あさ子宛光太郎のはがき参照。

注12

昭和九年三月二十日付秋廣朝子宛光太郎のはがき参照。

注13

昭和九年四月二十五日付秋廣朝子宛光太郎のはがき参照。

注14

昭和七年十一月十三日付水野葉舟宛光太郎のはがき参照。

注15

中原 綾子 なかはら・あやこ

注16

一八九八（明治三十一年）年二月十七日、長崎県生まれ。歌人・詩人。二十歳の時与謝野晶子の知遇を得て新詩社の同人となる。

注17

第二期『明星』前夜の頃で、毎月開催していた歌会の席上光太郎と出会う。中原綾子は、「高村先生がお一人加わられることよって座の空気が一層ひろびろと、同時に厚味のあるものになることを感じた」という（『第二期明星の頃』『高村光太郎全集』第六卷「月報」）。光太郎三十六歳、綾子二十歳のことである。その後、中原綾子は、一時与謝野門から離れ、昭和四年、吉井勇の「スバル」に属し、この「スバル」が終刊した昭和六年歌誌「いづかし」を創刊。光太郎の詩「人生遠視」はこの昭和十年八月号の「いづかし」に掲載された。その後、昭和二十五年二月、吉井勇に許可されて第三期「スバル」を創刊。五十号を最後に、鎌倉の病院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注18

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注19

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注20

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注21

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注22

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注23

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注24

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注25

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注26

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注27

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注28

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注29

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注30

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注31

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。

注32

院で昭和四十四年八月二十四日没、七十一歳。



- 注12 昭和十年三月十二日付中原綾子宛光太郎の封書参照。
- 注13 昭和十年八月十七日付中原綾子宛光太郎の封書参照。
- 注14 昭和十一年一月三日付長沼せん子宛光太郎のはがき参照。
- 注15 昭和十一年一月三十一日付長沼せん子宛光太郎のはがき参照。
- 注16 昭和十一年二月二十九日付長沼せん子宛光太郎のはがき参照。
- 注17 昭和十一年十月十三日付水野葉舟宛光太郎のはがき参照。
- 注18 昭和十二年五月十七日付長沼せん子宛光太郎の書留封書参照。
- 注19 昭和十二年五月二十二日付小野綾子宛光太郎の封書参照。
- 注20 昭和十二年六月十七日付長沼せん子宛光太郎の書留参照。
- 注21 昭和十二年七月十五日付長沼せん子宛光太郎の封書参照。
- 注22 昭和十二年八月七日付更科源蔵宛光太郎の封書参照。
- 注23 昭和十二年九月七日付更科源蔵宛光太郎の封書参照。
- 注24 昭和十三年十月五日夕付長沼せん子宛光太郎のはがき参照。
- 注25 昭和三十四年四月『高村光太郎と智恵子』所収「紙絵の思い出」による。
- 注26 昭和三十四年四月『高村光太郎と智恵子』所収「高村智恵子さんの思い出」による。
- 注27 伊藤信吉は『鑑賞智恵子抄』昭和四十三年十二月三十日・角川書店刊による。
- 注28 昭和十年二月八日付中原綾子宛光太郎の封書参照。
- 注29 人生遠視
- 注30 足もとから鳥がたつ／自分の妻が毒をのむ／自分の妻が狂気する／自分の着ものがぼろになる／照尺距離三千メートル／ああ此の鉄砲は長すぎる
- 注31 「著作権登録抹消手続等請求事件」における澤田伊四郎が構成した第一次案と「智恵子抄」との内容区分の対比「表Ⅱ」による。
- 注32 澤田城子『智恵子抄の五十年』龍星閣による。
- 注33 北川太一編『高村光太郎詩集』旺文社文庫による。
- 注34 注17と同じ。
- 注35 注13と同じ。
- 注36 注18と同じ。